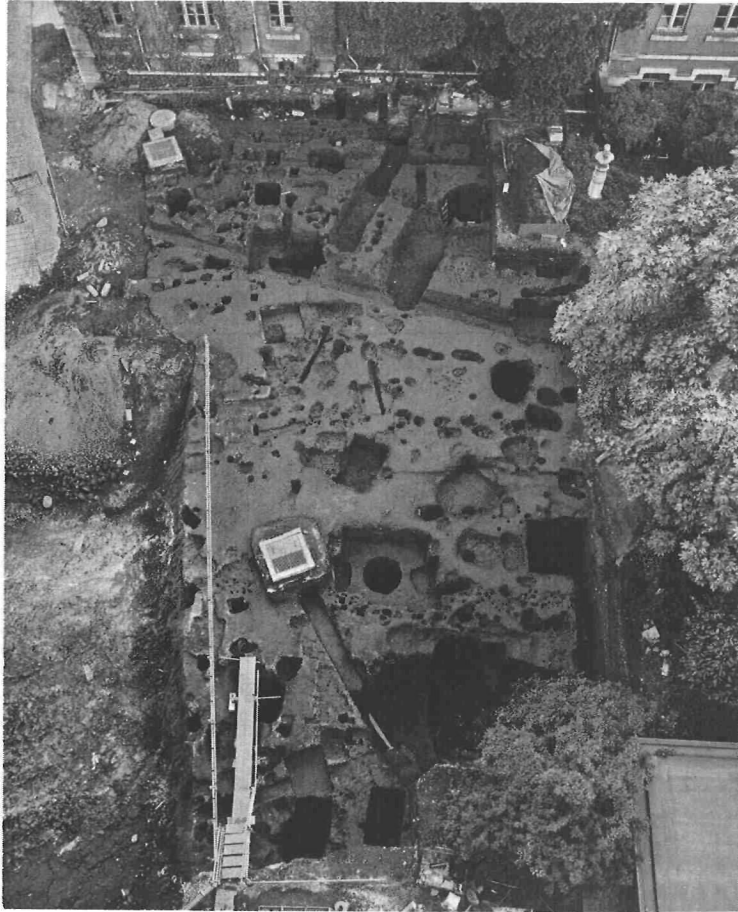


報 廣

東京大学理学部



目 次

表紙の説明	1
理学部D棟建築予定地の遺跡調査	赤澤 威 2
ドイツからの勲章	折戸 周治 4
飯山敏道教授	
フランス国家功労勲章受章	久城 育夫 5
温故知新	伊庭 英夫 5
松山一東京	鳥海 充弘 7
故 高橋秀俊先生	西島 和彦 8
遺橋 私と物理学	高橋 秀俊 9
神戸和雄氏を悼む	有馬 朗人 14
事務長補佐神戸和雄さんを偲んで	石井千鶴子 15
◀学部消息▶	15

表紙の説明

D棟建設予定地発掘終了時の遺跡全景

写真中央やや下部，排水溝の蓋の右隣りに見える丸い穴は江戸時代の井戸で，その他にも，地下に構築された当時の施設の痕跡が数多く認められる。（本文p.2参照）

総合研究資料館 赤澤 威

理学部D棟建築予定地の遺跡調査

赤澤 威（総合研究資料館）

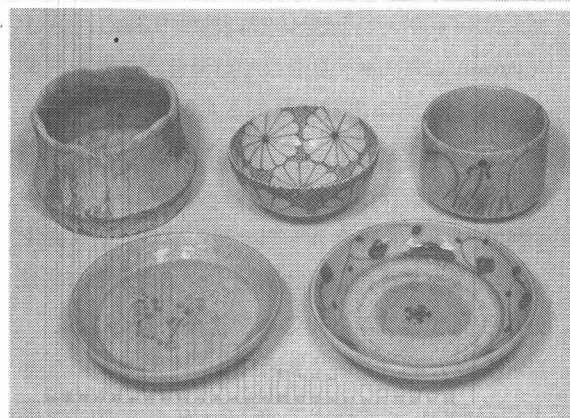
理学部D棟の建築工事がはじまった。工事の進展を一日千秋の思いで待っていた関係者にとっては、遺跡の調査が一向に終わらないことに、もどかしさを感じたことであろうが、この9月をもって10ヶ月以上にわたった屋外における調査は終了した。そして主として江戸時代の研究にとって、将来、高い価値を持つことになる数々の考古学的データを得た。

発掘地点が、江戸時代、加賀藩上屋敷の一角を占めていたことは、今に残る当時の絵図により事前に予測できた。そして発掘の結果は、これを考古学のデータをもってさらに具体的に論じることを可能にするように思う。その一つの例を紹介してみたい。今回数多く発見された地下式の土坑は絵図には描かれておらず、また当時の記録にも全く現れてこないものである。その形態や配列状態、その中から発見された瀬戸物類などをあわせて研究することにより、地下に構築されていた施設の構造や機能を具体的に論じることが可能になる。しかもそれが当時の記録を通しては知り得ない部分だけに興味もあり、かつ重要である。

発掘の結果、当時の建物や施設の跡と大量の遺物が発見され、これよりその室内研究に入る。室内研究の主たる目的は、発掘品および発掘中に作成した多数の図面や写真等の記録類を整理、分類、記載したのち、遺跡調査報告書の出版に備えた原稿を執筆することにある。遺跡の調査は、この報告書の出版をもって終了すると考えるのが常識であり、それまでにはさらに2年近い月日を要すると思われる。

この本郷キャンパス一帯はかつて上記の加賀藩・水戸藩などの藩邸で占められ、かつ随所に旧石器時代から縄文、弥生時代の遺跡が痕跡を留めて

いるので、今後の東大キャンパス内で計画される全ての建築工事には常に発掘調査を伴うのは当然である。



D棟建築予定地の遺跡で発掘された江戸時代の德利（上）とその他の陶磁器（下）

さて、今回実施したような遺跡の調査は通常、文化財保護法にもとづく「緊急発掘」俗に「行政発掘」と呼ばれ、「学術発掘」と区別されている。学術発掘とは当初から一定の学問的目標をかかげ、計画的に実施されるものを指し、緊急発掘は建物や施設の構築に際して破壊消滅の危機に瀕した遺跡を救済するために実施され、欧米では rescue archaeology project と呼ばれる。

このように、緊急発掘は少なくともそのきっかけにおいては、学問的脈絡のないまま、計画の大きさに比し不釣合な時間的制約のもとに計画されることが多い。この種の発掘は昭和40年頃、すなわちわが国が高度経済成長期に突入したころから増え始めるが、昭和50年頃を境いにして、その傾向は更に強まった。それは昭和50年の文化財保護法改正に伴い、主として地方自治体レベルで、緊急発掘が実施できるような組織が整備され、以前にも増して厳しくなった行政指導を、ともかく処理できる体制が整ったからである。

現在、40近い国公立大学に考古学研究室が設けられ、また考古学分野の国内組織である日本考古学協会の会員数は2,000名を越えている。これ

らの数字はいずれも過去10年間に倍増したことになる。この現象は確かに、近年、わが国の考古学の研究教育が大きく発展したとも考えられよう。しかしその間に行われた学術発掘は、全く増加しないどころか、むしろ減少の傾向を示しているのは甚だ憂慮にたえない。もちろん多くの研究者は後継者の育成からも、学術的調査を計画し実施することの必要性を痛感しているが、実際には破壊寸前に追い込まれた数多くの遺跡を救うことに追われているのが実情である。

この状況は急速に好転することはなからうと思われ、しかもこのことは考古学関係者にとっても、建物の新築を希望する研究者にとっても決して好ましくはない。われわれは江戸時代の大遺跡の上で研究と教育を行っているのだから、ぼつぼつこの問題で頭を悩まさずすむ方策を検討する段階にきているのではなからうか。

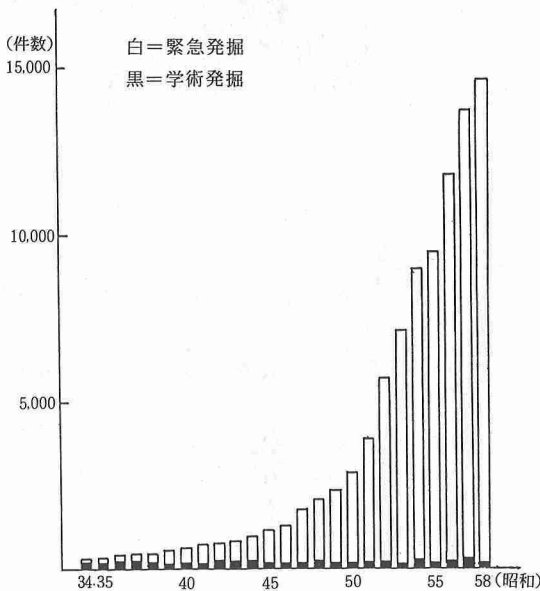


図1 埋蔵文化財発掘届出数の推移
(参考：埋蔵文化財ニュース、21・48. 奈文研、1979・1984)

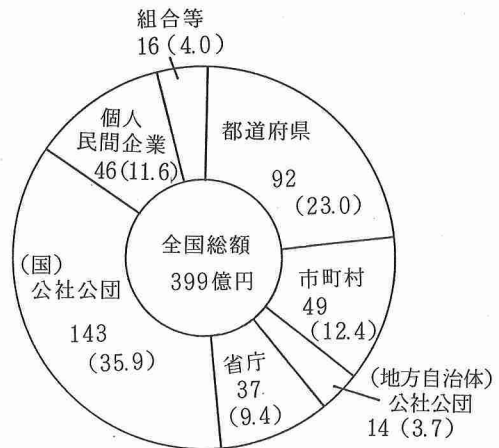


図2 緊急発掘に支出された費用の負担者別内訳
(単位：億円、カッコ内：%) (昭和58年度)
(参考：埋蔵文化財ニュース48, 奈文研、1984)

ドイツからの勲章

折戸周治(物理学教室)

ドイツ連邦共和国の勲章は、昔から伝統的に十字章であるらしい。したがって、形は映画等でおなじみの鉄十字章などと同じに見える。ただしこの十字章(Das Grosse Verdienstkreuz)の色は赤、黒、金で、赤は血、黒は硝薬、金は自由を表わすという、ドイツ建国以来の由緒あるものらしく、特別な功績のあった者に西独大統領から与えられる。この勲章を、物理学教室で素粒子国際センター長を兼ねる小柴昌俊教授が授けられたいきさつを書けとの御依頼で、その辺を御紹介したい。

叙勲の理由は科学分野に於ける日独協同研究に対する特別な功績という事で、具体的にはDASP及びJADE実験に関するものである。これらの実験は、電子・陽電子(e^+e^-)衝突反応を用いて、素粒子の内部構造をさぐり、また未知の新粒子を探がす事を目的としたもので、西独ハンブルグ市にあるドイツ国立電子シンクロトロン研(DESY)で行なわれた国際協同実験である。

そもその発端は今から約15年前に遡る。当時の素粒子物理の状況は、混迷に満ちたもので、主に陽子加速器を用いたデータから多数の共鳴状態が発見されていたが、それらを形成するより基本的なクォーク群の存在は確立されてはいなかった。また初めての実用的 e^+e^- 衝突装置はイタリアの Frascati 研で完成し、興味あるデータを出しつつあったが、将来これが素粒子実験の重要な手段になり、クォーク及びレプトン群の発見などを通じて、その後の素粒子物理の急速な進展に欠く事のできないものに成長することは、一般には予想されていなかった。小柴先生の第一の功績は e^+e^- 衝突実験の将来性を、おそらくは先生一流の直観で、鋭く見抜いた事であろう。

当時の日本では陽子加速器の建設計画が政治的に難航していて、国内に於ける e^+e^- 装置の建設は現実的ではなかった。このような事情で当時、衝突装置 DORIS を建設中の DESY へ乗り込んで協同実験を行う方針となった。これは日本の素粒子実験としては初めての本格的な国際協同実験であり、小柴先生は東奔西走されて、理学部に高エネルギー物理学実験施設を作られ、東大チームは DASP (Double Arm Spectrometer) 実験の準備段階から参加する事ができた。この実験で東大チームはいわばマイナーなグループとして電磁シャワー検出器の製作を担当したが、これは凶らずも実験の最も重要な検出器として威力を発揮した。DASP 実験は P_c , F 粒子等のチャーム・クォーク対を含む新粒子の発見、またチャーム粒子弱い相互作用による崩壊の検出の発見、また当時、混迷状態にあった、タウレプトンの確立等の重要な研究を行った。これらの研究のほとんどすべてに於いて、東大チームのメンバーが決定的な役割を果たしたと関係者は自負している。

DORIS 衝突装置での成果を基にして、その後更にエネルギーの高い衝突装置 PETRA が DESY に作られる事になった。その際東大チームはハイデルベルグ大と共に、新しいグループを作り、JADE (Japan-Deutcheland-England) 実験を提案し、設計、建設、実験、解析の各段階で主導的な役割を果たした。この JADE 実験は、強い相互作用を媒介するグルーオンの検出のほかにも、電磁相互作用と弱い相互作用の干渉項の検出、レプトンやクォークの大きさが 10^{-16} cm 以下である事の確認、超対称性粒子の質量の下限を与える等の研究成果をあげた。

これらの実験を通じて東大チームの実力が認め

られ、それが現在、欧州原子核機構（CERN）に建設中の LEP 衝突装置を使う OPAL 実験計画につながっている。また、これらの実験で成長した若手研究者が日本のトリスタン計画等の最前線に携っている。ここに至るすべての過程に於いて小柴先生の存在は欠かす事のできないものであって、西ドイツの関係者がこれを正しく認めて、今回の叙勲になったのは、まさに炯眼というべきであろう。また我々にとって教育になったのは、相手の立場を理解すると共に、こちらの立場を明確に述べて、ねばり強く交渉するという、先生の外交姿勢である。更に、ドイツ関係者にとっておそ

らく教訓になったと思われるのは、最初から最後までキチンとしたドイツ流のやり方の外に、日本式あるいは多分に小柴式のやり方、すなわち、初めは見通しが効かず、実現は困難かと思われるが、とにかくがんばってやってみるとうまく行く、というやり方が、世の中に存在し、時には有効である事を認めさせた事であろう。

最後にこれらの実験の成功には物理学教室の皆様を初めとして、歴代理学部長、総長、及び所管の文部省学術国際局、等の応援が不可欠であった事を述べ厚く感謝すると共に、今後一層の御支持をお願いいたします。

飯山敏道教授フランス国家功勞勲章受章

久 城 育 夫 (地質学教室)

理学部地質学教室の飯山敏道教授（現評議員）は去る10月、フランス政府より国家功勞勲章（Chevalier d'Ordre National de Mérite）を受章された。飯山教授は昭和51年フランスより理学部教授として帰国されて以来、理学部における教育および研究に従事される傍ら、日仏間の科学者の交流および共同研究等に多大の努力を払って来られた。この数年間は特に、日仏地球科学者による日本海溝の調査・研究（KAIKO計画）の推進に中心的役割りを果されている。また、日本のみならずフラフランスの若い研究者の養成にも盡され

ている。フランス政府は飯山教授のこれらの功績を高く評価し、今回の受章となった。理学部一同、飯山教授に心からお祝いを申し上げますとともに、今後の御活躍をお祈りする次第である。

KAIKO計画では日本海溝の成因およびプレートの沈み込みの機構等に関して大きな成果をあげている（理学部広報17巻、2号参照）。なお、この計画の日本側の推進者の一人である、元海洋研究所の奈須紀幸教授（現放送大学教授）も飯山教授と同時にフランス国家功勞勲章を受章されている。

温 故 知 新

伊 庭 英 夫 (生物化学教室)

J. D. Watson が書いた分子生物学の教科書を手にしたのは、私が駒場にいた頃で、図書館に一冊しかないものの青焼きをつくり、感動して読ん

だ覚えがあります。私はそれをほとんどフィクションのようにとらえ、どこか頑固に受け入れを拒絶していたところがありました。当時教養学部の

正規の生物学の講義では、セントラルドグマについて全く触れられていなかったこともあり、あまりにもうまくできすぎているとしか思えなかったのです。半信半疑のまま、当時、生物化学科で分子生物学及び分子遺伝学的研究を開始された岡田吉美先生の研究室に押しかけ、はや10数年がたちました。この分野での情報の蓄積、分析能力の向上は驚くべきものがあり、自らもいくばくかの貢献をした自負もあるのですが、振りかえってみると舐斗雲にのって得意になって飛びまわる孫悟空のような気がしないこともなく、セントラルドグマという仏陀の5本指のような存在に、多少は慎み深くなりました。

今年の4月まで2年半ほど、米国ロックフェラー大学の花房秀三郎先生のもとで、動物ウイルス学を学ぶ機会を得たのも、良い経験となり、印象深いことがいくつかありました。ある晩のこと、「古い写真を見つけました。」と花房先生が声をかけられたので、実験の手を止め、振り向くと先生の掌中には古めかしく正装した日本の学者6〜7名と、これを迎えた当時のロックフェラー研究所（ロックフェラー大学の前身）の研究者10名程が、フレクシナーホールの前あたりで整列した記念写真がありました。それは1920年代に、日本の生理学・細菌学・ウイルス学等の方面で先駆的な仕事をしていた方々が渡米した時のものでした。しばし、写真に登場する著名な方々についての話がはずんだことを覚えています。

この中で3人の方々の顔が今でも思い出されます。当時この研究所において、円熟期にあった細菌学の分野で続々と業績をあげていた野口英世博士、私も今、研究材料の一つとして使っているラウス肉腫ウイルス（RSV）を1911年にニワトリから単離したラウス博士、ほぼ同時期に日本で独立に同様のウイルス（藤浪肉腫ウイルス、FSV）を単離していた藤浪博士です。ウイルスの概念を一切とりいれず、すべての病いを細菌で説明しようと執着しこれから数年後に黄熱ウイルスで命をおとす野口博士と、1960年以後になってから自ら

発見したウイルスが、分子生物学、細胞生物学に想像を越えるインパクトを与え続けることも知らずこの不思議な濾過性病原体と苦闘していたラウス博士や藤浪博士が対比されました。ともかく彼らは一堂に会し、一枚の写真におさまっているのです。

RSVはその後も米国、欧州で研究が続き、1970年代に、このゲノム中から発癌とその維持を担う *v-src* と呼ばれる *oncogene*（癌遺伝子）のひとつがはじめて同定されました。一方FSVの方の研究はほとんど中断されていましたが、近年になって花房研を中心に本格的な研究が始められ *v-fps* という他種の *oncogene* があることが示されています。このウイルス・ストックを探し求めたときには、ストックは日本国内では見い出されず、やむなく欧州や米国内から取り寄せざるを得なかったという話を、花房照子先生からお聞きしたことがあります。この写真がとられたあとの2つのウイルスの研究の歴史にもまた彩かな対比があると申せましょう。現在 *oncogene* の研究で、日本が米国に比してかなりおくれているという原因の一つは、こんな所にあるのかも知れません。

現在までに20数種の *oncogene* がこうしたレトロウイルスと呼ばれる癌ウイルスから同定されていますが、現在、細胞生物学・発生学を含む生物学の種々の分野でこの *oncogene* が注目を集めているのは、「*oncogene* は、本来はウイルスの遺伝子ではなくて、そのウイルスの正常宿主細胞の染色体中の遺伝子である *proto-oncogene* に由来している」という事実の為でしょう。*proto-oncogene* が宿主動物に限らず広くヒトから海綿動物や酵母といったものにまで保存されていることも、いよいよこの遺伝子の重要性を支持します。この *proto-oncogene* がウイルスに取り込まれて多量に発現されたり、突然変異を受けることにより癌化—増殖異常や分化の阻害—の原因となることから最近では *proto-oncogene* は増殖・分化・発生に極めて重要な機能をもっていると考えられるようになりました。

私共も proto-oncogene や oncogene の機能の研究を始めていくつもりです。しかし proto-oncogene を全能の神のようにとらえ強調する一部の風潮には批判的でありたい、また重要と思われる

る生命現象については、すぐには解明できなくとも手順を踏んだ息の長い仕事をしていきたい——これがあの一枚の古い写真から学んだ事かも知れません。

松 山 —— 東 京

鳥 海 光 弘 (地質学教室)

松山は紅葉が遅い、11月末から12月にかけて松山平野の周囲の山々が色づく。この時期には四国でも冷い風がまま吹くが、小春日和の時からかなり多い。そこで私のように岩石学の一学徒にとっては、この時期の調査はまことにうれしい。第1に真夏の暑さから解放された山々は実に新鮮で、色づいた木々の間を調査行することは室内作業のいらいらを十二分に解消してくれる。調査行にはしばしば海岸を選ぶことも多い。これは海岸が草木におうわれることなく、様々な岩石の様子を連続的に見せてくれることが大きな理由なのですが、又晩秋の海が波頭に光る太陽の光が濃いブルーに美しく映えるのも楽しみなわけです。この時期の東京はすべてに冷く、空気が乾燥して吐く息が白く濁る。

7年前までは東大の総合研究資料館にいたのですが、この時期の東京近郊のことはまったく忘れていた。人の体感気候が記憶をさまたげているのかもしれない。木枯しだけが純化して残ってしまっている。そのように環境適応しきって松山から東京へ来てみると夏はたいへん涼しく、秋は大変早くやって来て残暑というものの実感がなく晩秋を迎えてしまう。

松山での研究教育生活は新しい教室であったため大変活気にあふれ、楽しいものでした。学生の質は、最近よく人々のうわさにのぼる程には低下してはいないというのが実感でした。それは大きくは授業をうける態度とテストに臨む態度に発するものだと思う。特に地方の小都市の学生がややもするとすぐ無気力に落ち込むのは、自分達の能力を過小評価することによっているようにも見える。卒論や卒験で意義のはっきりした仕事や、新しいことを導き出せる研究が出来ると、我然、自分から様々な論文やテキストの類を乱続し始める。そのようなプロセスは昔も今も多くの人々の個人的な経歴の中に埋め込められていると思う。たぶん研究という行動の原初的なものなのでしょう。東京での研究教育生活の中に、そのようなプリミティブな“もの”を経験できるとしたら大変楽しい。地学現象を研究する者にとって、その感度は深いのではないのでしょうか。その過程を分解して見ようという方法をとらざるを得ないとき、その素過程が単純で理解しやすい形におき替えられたら、それはたぶん至宝の“もの”なのでしょう。それを望むことは研究教育生活を続けていく大きな動機になっています。

故 高橋秀俊先生

西島和彦(物理学教室)

高橋秀俊先生は東京大学理学部の物理学科を御卒業の後、38年間にわたって理学部におつとめになり、その間大型計算機センター長および(旧)情報科学研究施設長を併任され情報科学科の創設に努められましたが、この間一貫して物理教室に籍をおかれて数々の御業績を残されました。

先生の御仕事は統計力学の基本的問題に始まり、レスポンスゆらぎ雑音の問題は先生によって電気回路におけるナイキストの定理の形でとらえられました。回路理論・システム安定化の問題・フィルターの理論でのお仕事はクラマースの定理の先生による独立な発見と関連しております。霜田・タウンズ両先生となされたメーザーレーザーの量子雑音の研究では、東レ科学技術賞をうけられました。先生は1次元物質では相転移が存在しないことの明快な証明を発見され、同じく固体物理の分野ではチタン酸バリウムを中心とする強誘電体の研究を独自に進められました。

先生は後藤英一氏の考案によるパラメトロンを使い、研究室をあげてパラメトロン電子計算機を作られ、朝日賞および情報処理学会の特別功績賞をうけられましたが、この間に先生の示された指導力、先生が御自身でなされたソフトウェアの開発・ライブラリの整備・数値計算・数値解析の御研究は目を見張らせるものでした。先生のはじ

められた素数法計算に対しては山内記念業績賞の授与が決定されております。

先生は東大の大型計算機センターにおいても、センター長としてみずから待ち行列の処理、タイムシュアリングシステムの設計に貢献されました。

先生は昭和50年に東大を定年で御退官になるとき、理学部ではたらくことができよかったと、おっしゃって下さいましたが、これはそのままに高橋先生と御一緒に仕事をする事ができてよかったと思う理学部および物理学教室の一同の心からなる感慨に通ずるものがあつたと思います。先生は本当に学問というものがおすきでした。

先生は物理のあらゆる領域に興味をもたれました。高橋語録という表現があるほど、先生はその独得な考え方とひらめきをしばしば示されました。

物理教室では、どんな難問でも最後には高橋先生にうかがいに行けば、考えてヒントを教えていただけるのだと信じられていました。

先生は昨年5月に理学部においてになり、談話会で古典物理学雑話と題しお話をして下さいました。またいつかお話をうかがうことができると信じておりましたのに、今回お別れをすることになってしまいました。

先生の御業績をふりかえり御指導いただいた後進よりの心からの御礼を申し上げます。

遺稿 私と物理学

高橋秀俊

物理学との出会い

小学校3年のときの、ある日曜の昼食時だったと思う。なにげなく見たスプーンの内側に映る自分の顔、それが上下逆さになっているのを見たときの驚きこそ、私の物理学との最初の出会いであった。傍らにいた父に言うと、父はそのことを知っていたのかどうかは忘れたが、とにかく、早速、光学の本を書庫から出してきて、凹面鏡による結像のところをいろいろ説明してくれた。父は東京大学文学部で心理学を専攻したので、理科系ではなかったが、天文や物理などへの興味が強く、このときも私と一緒にいろいろ考えてくれたのだった。その書物はたしか『美しき光波』という題の通俗書だった。この本にはレンズや鏡による結像のほか、望遠鏡や顕微鏡の原理など、いろいろなことが書いてあり、本文や数式はあまり興味がなかったが、光線の図は一応理解できるので、すっかりおもしろくなった。挙句のはては、ひまさえあればノートや紙切れにレンズと光線の図ばかりかいているので、“レンズ博士”と級友からよばれるほどだった。

今から考えると、これは物理との出会いとして、この上もない機会だったと思う。物理学の中で幾何光学ほど単純で、理屈どおりにいき、目に見えるものだけで話がすむので、自分で考えて納得できるようなものは、ほかにはないと思う。電磁気はもちろん、力学でさえも、“力”という直観で把握しにくいものを含み、小学3年生には無理である。幾何光学では、幾何学といわず、幾何図形に対するある程度の直観さえあれば、十分なのである。このような物理学へのまたとない導入である幾何光学が、今日の理科教育で冷遇されている

と聞くのは、私にはたいへん残念である。

やがて大正12年10月に、誠文堂から、原田三夫氏主幹の『子供の科学』が発刊された。これはまさに千天の滋雨で、早速、愛読者となった。特に喜んで読んだのは、ラジオや鉄道模型などの製作記事だった。翌年はちょうどラジオの本放送が始まったときだったので、部品を買い集めて1球式のラジオを組み立て、東京だけでなく大阪や名古屋の放送までも聞こえるのに胸ときめかせた。同じころ刊行された『無線と実験』もいつか毎号購読するようになった。この雑誌はもちろん少年用ではないので、わかるはずはないのだが、ただ回路図をながめたり製作記事を読むだけで楽しかったのだろう。“インピーダンス”という言葉もこの雑誌で覚えた。一方、同じ誠文堂の『科学画報』は愛読とまでは至らなかった。このへんが、後年、電気回路やエレクトロニクスに深入りする素地だったのだろう。しかし、ラジオのほうは、その後は大学卒業までごぶさたすることになる。

中学校・高等学校時代

中学、高等学校はいわゆる7年制の武蔵高等学校で過ごした。当時からの有名校として、その特色ある教育方針、特に初年級での理科教育についてはよく知られているが、私にはなにか“肌に合わない”ところがあって、あまりいい印象はもっていない。しかし、高校受験という関所なしに好きなことに没頭できたことは、感謝している。また、その三理想の一つ、「みずから調べ、みずから考える」という理想は、私にぴったりだったように思う。

しかし、学校での授業に関するかぎり、7年間に特に強い印象をもったものは物理にはない。学

校に感謝するのは、なんといっても、英語やドイツ語である。武蔵では語学は特に20人の小クラスで教えるという力の入れ方であった。

武蔵の授業で本当に楽しかったのは、『わかる幾何学』などの著書で今日でも名の知れている、秋山武太郎先生の幾何学の名調子の講義であった。

ではその7年間、自分ではどんな勉強をしたか、それもあまり正確には思い出せないが、趣味としての鉄道研究（今日言う鉄道マニア）のほかは、もっぱら数学、そして物理の勉強で、そのためいろいろの本を読んだことは確かである。最初に読んだのは弘道館の『高等数学講座』で、そこで微分積分、3次、4次の方程式の解法、連分数、方程式の数値解法、など、後で高等学校で習うようなことを一通りマスターできた。同じころ、共立社（今日の共立出版）から『軌近高等数学講座』が発行され、これはずっと高等で、関数論、集合論、群論など大学初級程度のものも含まれていたが、これは、学校の図書にあるのを借りて目を通した程度である。『高等数学講座』はそんなわけで特に難しいと思ったところはなかったが、一つだけどうも何回読んでよくわからなかったのは、“力学”という項目だった。結局、わからなかった原因は、ベクトルの概念、それに伴って力の場と曲線積分、そして仕事という量の意味が、十分にのみこめなかったことにあるように思われる。その私が、今日、大学の1年生に力学の講義をする羽目になっているのも皮肉である。

物理に関して最初に読んだのは本多光太郎博士の『物理学通論』で、それは本の発行年からみて、昭和4年のつまり中学3年のときらしい。この本を当時どれだけ理解できたか疑問であるが、特に熱力学のところとマクスウェル方程式のところがよくわからなかったことを記憶している。そして私が本当の（大学程度の）物理学に触れる最初の機会を与えてくれたのは、岩波講座『物理学及び化学』であった。この講座ではじめて流体力学、電磁気学、結晶学などを通じて、物理学とは高度に数学的な、数学そのものであるといってもいいよ

うな学問であるという事実、前から話では何回となく聞き知っていた事実を、具体的な内容を通じて体得することになった。

この講座の中で、今も忘れられない一節がいくつかある。一つは“交流理論”の項目の一節（後述）で、もう一つは石原純博士担当の“電気力学”の序章である。後者で石原博士は、“電気力学を一貫する原理は、18世紀の物理学を支配した力学的自然観、つまりすべての物理現象を力学との類推によって論ずるという方法論である。すなわち電磁気現象を力学からの類推で扱うのが電気力学である”という意味のことを述べておられる。最初読んだときは、その意味するところを理解できなかったが、この一節こそ、やがて私の物理学に対する態度を示す根本原理となるのである。

さて、いよいよ大学を受ける段になって、学科を定めなければならない。候補となるのは数学科、物理学科、それと工学部の電気工学科である。ここで工学部は入試に実技を伴う体育があるということで、運動神経の鈍い私は条件不利ということで、候補から除外。残る数学と物理のうち、物理をやれば数学はある程度やれるし、独学も可能ということで、結局、迷うことなく物理に決めた。また、当時は相対性理論、量子論という二つの革命が物理学で起こって間もないころで、われわれ若い者を魅了するものに満ち満ちていた。私の父はたまたま岩波書店主岩波茂雄氏と特別に親しい間柄だったので、家には岩波書店版の、最新の物理学に関する書物、たとえば石原純著『現代物理学の諸問題』、『物理学文献抄』I、IIなどがあり、そんなものを読みかじって、新しい物理に対するあこがれもつものっていたところでもあり、物理学科志望というのは、いわば“唯一の解”であった。

大学卒業後

大学での講義の印象その他については、まだ差し障りのある面もあり、一切省くことにしよう。とにかく、楽しく3年間を過ごしたといえれば十分だろう。なにしろ、高校までの嫌な科目、たとえ

ば体操や作文，図画，倫理などがなくて，朝から晩まで好きな数学，物理学の勉強なのだから，悪くはない。もっとも，ただ楽しんでいて試験勉強をしなかったために，成績はあまりよくなかったようだ。

さて，東京大学を昭和12年に卒業すると，教室に残って，放電研究の大家である本多侃士先生の助手になった。当時の物理教室の慣習では，助手はいわば腰かけで，数年勤めるとどこか会社，研究所などに世話されて行くのが普通だったから，助手を拝命してもそれほど嬉しくも思わなかったように思う。しかし，先生には，われわれは“応用電気学”の授業を受けており，たいへん気さくなよい先生であることを知っていたので，その点では不足はなかった。

ところで，当時の常識では，当然私は放電の勉強をしてその道の専門家として身を立てるということだったわけであるが，私自身はどうも放電というものにあまり興味がわかない。少なくとも私の一生の専門としようという気分にはなれなかった。一つの理由は，先生のような大家のそばにいて同じことをやるのはいやだ，という生来のあまのじゃくの性質だったかもしれない。それでも幸い，先生の研究に必要ないろいろの装置，たとえば高電圧の測定器とか，コロナ電流を高圧側で測る装置とか，そういうものをつくるのは興味があったので，そういう面で多少ともお役に立つことはあったと思う。先生もえらい助手をとったものであるが，温厚な先生は落胆はされても，特に叱られることもなく，そうして助教授に決まる5年後まで，追い出されることもなく勤めた。そして，いろいろな測定，たとえば放電による放射電波の測定，沿面放電の測定などについて，エレクトロニクスを応用したいろいろの回路を工夫し，そんなことで，当時はまだそれほど普及していなかった真空管応用技術にかなりの専門的知識を蓄積することができた。

とはいっても，放電に関して私は私なりに，ある種の興味はもっていた。それは放電の電子的過

程についてではなく，現象的な電流電圧特性についてであった。普通のグロー放電は電流の小さい（1 mA以下ぐらいの）領域では，電流が減ると電圧が逆に増すという負抵抗特性をもっている。電流がゼロの状態はつまり点火電圧であるが，それが放電を持続するときの電圧より高いことはそのあらわれといえる。ところが，ようやく点火する状態とある程度強い放電を維持する状態をつなぐ電圧－電流曲線は，容易に測定できない。それは途中の状態は振動を起こすからであり，振動の原因は並列についた静電容量と考えられている。

そこで考えたのは，不可避と考えられている並列の静電容量を，真空管のフィードバック回路でつくった負の容量で中和することによって，振動がとめられないか，という考えであった。そこでその考えにしたがっていろいろ実験を繰り返した結果，発振する領域を若干狭くすることには成功したようにみえた。しかし，結果はそれほど満足とはいえなかったが，とにかく京都で開かれた昭和14（1939）年の数学物理学学会年會に発表することにした。私にとって最初の学会発表である。

こんな研究はずいぶん重箱のすみをほじくるような，つまらない仕事に思われたであろう。たしかにこの研究自身はそうだと思うが，私自身にとっては，これは“安定化の問題”という，より一般的な問題の，一つの実例だという意義があった。安定化の問題一般の理論的な解決は，昭和16（1941）年の広島文理大学での年會で報告し，1942年の学会記事に発表した。この問題は自動制御の問題であり，当時は数物学会で発表してもほとんど何の反響もなかった。戦後ノーベルト・ウィナーのサイバネティクスが発表されて，制御の問題が，物理屋を含めて，専門分野を超えた広い関心をよびおこすことになるなど，どうして予測できたろうか。

線形システムから物性へ

私が興味をもった問題を大きく区分けすると，一つの領域は，上述の問題も含めて，線形システ

ム論と分類される。そしてそれに引きこまれる最初の取りかかりが、岩波講座の中の、前述の『交流理論』にあったのである。『交流理論』でそんなに大きい衝撃を受けたのは、何かといえば交流回路の複素数による取り扱い、つまりインピーダンスの複素数表示のことだった。そこに書かれていたのは、 L, R, C の直列回路のインピーダンスは、 $R + j(L\omega - 1/C\omega)$ となる、というそれだけのことである。しかし、そこで私の頭にひらめいたのは、“ L, R, C からできた回路は、どんな複雑なものでも、直流回路の抵抗のかわりに、この複素表示のインピーダンスを代入すれば、直流回路と全く同じようにして扱えるはずだ”ということであった。そしてそこで、大きな夢が生まれた。“そのときの端子から見た回路のインピーダンスは周波数 ω の関数となるはずだが、それはどんな関数になるのだろうか、逆に ω のある関数 $f(\omega)$ を指定したら、 $f(\omega)$ をインピーダンスとする関数を見いだすことができないだろうか”（回路網合成問題）。

その時点では、これはもちろん夢にすぎなかった。しかし、この夢はいつまでも私の脳裏を去ることがなかった。そして“電気回路”と名のつく本をいろいろ買いあさった。しかし大部分の本は“つまらない”本で、私の夢を実現するのに役に立たなかった。それでも、自分でもあれこれと考え、またアメリカのフォスター、ドイツのカウエルなどの同じ発想に基づく論文をみつけるなどして、かなり目標に近づいたところで、東京電気（東芝の前身の一つ）の技術誌に“回路網の合成”という題の解説記事が出たのである。著者は後に慶応の工学部に移られた末崎輝雄氏であった。読んでみるとまさに私の夢に描いていた問題そのものであり、しかもインピーダンス $f(\omega)$ が物理的実現可能条件を満たささえすれば、必ず実際に実現できる、具体的手順が与えられているのであった（ブルーネの実現法）。これには全く驚いたが、“してやられた”という気持ちはさらさらなかった。むしろ自分の夢が正夢だったことの確認を得

たので、この問題をさらに先へ追究することが自分に与えられた仕事だ、という確信をもつことができた。なお、そのころ雑誌や書物から得た知識に自分の考えた総合報告を、雨宮綾夫さんの勧めで数物の会誌にのせた。後からきくと、意外な人がこれを読んでいて、このような問題に注意を向けさせるのに役立ったようである。

そのようなわけで、卒業してから何年かは、物理教室に属していながら、物理というよりは電気工学、あるいはむしろ通信工学に属する問題に興味の中心があった。とはいっても、物理に関するたくさんの雑誌、書物、そして新しい話題に満ちた物理教室の談話会、そういう環境の中において、物理に無関心でいられるわけがない。特に興味をもったのは、量子力学や統計力学などの新しい物理学の応用分野として、当時ようやく地歩を確立しつつある（分子論的）物性論であった。それも当時は、東北大学の金属材料研究所を中心に、金属や合金が中心的な話題であったが、私はどちらかという当時の流行からはずれたイオン結晶や分子結晶など、つまり誘電体に関心があった。

誘電体に特に興味をもった直接のきっかけは、デバイとザックの「分子の電気的性質」という本、そしてその中にあったロッシェル塩の異常な誘電性（つまり強誘電性）の記述を読んだことにあったが、本当の理由は、人があまりやらない方面の問題というところにあったように思う。そして（液体や固体の）誘電体の特徴は、分子間の電気的相互作用が強いことで、したがってその理論は古典的な統計力学が主役を演じ、当時流行の磁性体のように、量子力学が決定的な役割を演ずるものと対照をなしていた。現在もそうであるが、私は量子力学的な問題にはちょっと弱く、いわば独学で物性論の学者に仲間入りをするのにとっても自信がなかったわけである。一方、誘電体の双極子の相互作用の統計力学は、同期生で卒業後も物理教室に残って親友だった高木豊君からいろいろ話を聞き、自分でも考え始めていた合金の超格子の統計理論（いわゆるイジング（Ising）モデルの理論）

と共通点が多かった。これも誘電体を選んだ一つの理由だった。

そのようなことで、いわば“誘電体論”をひっさげて物性屋のグループの仲間に入れてもらったわけであるが、時あたかも水素結合の発見、スレーターの KH_2PO_4 の強誘電性の理論の発表などがあり、それらに関連して自分の考えを、当時新しく結成された“物性論懇談会”で発表したことなどから、すっかり“誘電体屋”で通るようになってしまった。そこへまた、戦時態勢に入って設置された“高誘電物質の研究”を主題とする“研究隣組”に加えてもらったこと、そして、その中で小川建男氏が新強誘電体 BaTiO_3 (チタン酸バリウム) を発見したこと、などが続いて、結局、戦後も10年ばかり、誘電体屋の表看板をはずせずに過ごすことになった。しかし、戦後数年、私の興味の中心は、再び通信工学のほうから生まれた情報理論、デジタル計測、そして、その発展としてのデジタル計算機というように、大学卒業直後に選んだ路線の、いわば延長線の上へ復帰することになる。

私の秘法

こうして一人の物理学者が世に出たわけである。しかし、それは世間一般の物理学者のイメージとは著しくちがったものだった。そもそも私には、表看板はともかくとして、自分の意識の内には、“物理学”より細分された自分の専門というものがない。実際そのころの私は、自慢ではなく、原子核関係を除く物理のどの分野の話でも理解し、討論することができた。もちろん専門化の進んだ今日の物理では、そんなことはだれにも不可能だろうが、当時でもそう容易なことではなかったはずである。それがどうして私にできたか？ 私は超人、天才の類だったか？ もちろんそんなことはない。私はたくさんの本を片端から読んだのか？ それも全く反対で、私ほど本を読まない人も珍しい。すると何か秘密があるにちがいない。そのとおりである。私は、物理の一つの分野の専門

家となるかわりに、“物理学”というものの専門家になったのである。力学でも電磁気でも化学反でも、それらに共通な考え方、法則というものがある。それを発見すれば、各々別の分野の知識は一つにまとめられ、それを覚えるのも容易である。こうして、各分野の話や記事をいつもそういう一般的な枠組の中にあてはめて理解することによって“1を聞いて10を知る”ことが可能になり、また書物には書かれていない新しい物の見方も生まれてくる。

多くの人に、私は“頭がいい”と思われている。しかし、碁、将棋の類、そのほか限られた時間で答を出さなければならない問題には、私はさっぱりだめ、平均水準以下である。だから物理や数学の専門書を読むときでも、数式を追って理解するのは苦行の一つである。ではどうするかといえば、前提と最終結果だけを見て、あとは自分で計算してみる。どうにもわからないときだけ本を盗み見する。自分で本を書くときにも、式は決して他の本から書き写すことはせず、全部自分で計算しながら書く。そのため、計算誤りが多くなるのは、大目に見ていただいている。

だから私の知識は、人からきいたこと、本で読んだことのデータベースではない。すべて、まず頭の中にできあがっている自分の知識の枠組に合うように再構成されたものである。そのため、人の話を理解するには、人一倍時間がかかる。しかし、そうやって自分の枠組に組みこんだ知識は、後の応用にも役立ちやすいし、本の情報にはない新しい情報も含んでいることが期待できる。

私はこの秘法を自慢する気も、人に勧める気もない。ただ今の私には、それ以外のやり方は、もはや不可能なのである。

後記「私と物理学」は高橋秀俊先生が入院される直前に執筆され、高校通信・東書【物理】No.228（東京書籍 昭和60年1月1日発行）に掲載されたもので、先生が私達に遺された最後の文章になりました。同誌の許可を得て転載いたします。

《 訃 報 》

神戸和雄事務長補佐

本学部事務長補佐（総務担当）神戸和雄氏は、去る12月1日（日）自宅附近において自動車事故のため急逝されました。享年49才でした。

同氏は昭和34年6月東北大学庶務部人事課に奉職され、昭和39年5月文部省人事課給与班、昭和43年4月国立近代美術館庶務課人事係長を歴任、昭和54年4月本学部庶務主任となられ、昭和56年4月本学部事務長補佐に昇任されました。

同氏はこのような多彩な経歴に基づく豊富な知識と経験により理学部の管理・運営を円滑に推進



するために事務長補佐として十分に力を発揮されました。まだこれからご活躍が期待される最中、若くして亡くなられたことは痛恨にたえません。同氏のご功績とお人柄をしのび深く哀悼の意を表し謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（理学部）

神戸和雄氏を悼む

有馬朗人（理学部長）

理学部事務長補佐神戸和雄さんが急逝されたことは、まことに驚き、悲しむことであった。先ず御冥福を心から祈るものである。

現在東京大学が直面している問題において神戸さんの力に頼っていることが非常に多かった。例えば専門行政職の問題、60年定年制施行後の処置、シンガポールとの国際交流等々である。そのどれをとっても神戸さんの精力的な活動によって支えられて来たことである。また最近行われた生物学国際シンポジウムでの神戸さんの尽力は大変なものであった。

神戸さんの人柄は内に確固たる信念を持ちながら、人の言をおだやかによく聞く人であった。その上実に適切な処置をしてくれる人で、私は全幅の信頼を置いていた。神戸さんはまた人の気持ちをよく汲む愛情のあるそして誠実な人であった。その愛情のある眼で理学部全職員の動勢をよく見ており、重要な場合常に判断を誤らなかつた。

神戸さんは大変責任感の強い人であった。シンガポールとの国際協力のため、同国より一人の数学者が東北大学へ行くため成田空港へ早朝に着く

ことになった。私は電報を打って上野へ来てもらったらいよいよと言ったが、神戸さんは黙って成田へ行って東大へつれて来た。しかし迎えに行ったことなど一言も言わなかつた。ただその数学者が無事に気持ちよく日本に滞在してくればよいという責任感と愛情の発露であった。私はその行動に心から敬意を表したのである。

神戸さんはロマンチストであった。酒が入ると神戸さんは私が古い歌が好きだからと、幾つかの歌をうたってくれた。私も一緒に蛮声を張りあげたのは11月22日の夜であった。その次の週、私は神戸さんがなんとなくつかれたと言うか淋しそうな姿が気になっていた。11月29日仕事の話が終ってもなかなか神戸さんは立ち去らなかつた。

私は何時も優れた同僚や、事務職員の方々にめぐまれて幸であると感謝している。その中でも特に信頼していた神戸さんを急になくしたことは、悲しんでも悲しみ切れるものではない。神戸さんの魂が我々を今まで通り温い目で見まもって下さるのを祈るのである。

事務長補佐神戸和雄さんを偲んで

石井 千鶴子（中央事務）

事務長補佐神戸和雄さんの思いもよらない突然の訃報に接しまして、暫くはそのことが信じられませんでしたが、余りの悲しさにわれを忘れる思いでした。

理学部の事務長補佐として、ご多忙な日程をこなしていらっしゃる神戸さんに、お世話になりご指導を受けた方はずいぶん大勢いらっしゃると思います。日常のお仕事の面では勿論のことですが、神戸さんの深みのある暖かいお人柄には、多くの方々が敬愛の念を寄せていらっしゃったと思います。御担当なさっていらっしゃったお仕事は、人事から、組合交渉、そして国際交流の面と多方面に及んでいましたが、いつも細やかなお心遣いとご配慮をお持ちでした。ご相談を受けられた際には、相手の気持や立場をよくご理解なされ、人情の機微に触れる真摯なお姿をいつも拝見しておりました。私はシンガポールとの学术交流の仕事のご指導を受けておりましたが、この交流

事業の発足以来その促進に努力なされ、両国の理学交流の発展に多大なご貢献をなさいました。来日した多くの研究者が、神戸さんの適切なお言葉やお人柄、心暖まるご好意に接して、日本で滞在をどれ程、有意義な満足の数々とする事ができたか測り知れないと思います。

神戸さんは北海道でお生まれになり、仙台で青春時代を過ごされ、東北大学、文部省、国立近代美術館を経て、東大へいらっしゃいました。美術に大変ご造詣が深く、又、山をこよなく愛していらっしゃいました。登山歴はお長く「日本百名山」にある殆どの山々に登っていらっしゃいました。冬はスキーに出かけられ、一級の技術を持つ程のスキーヤーでいらっしゃったそうです。

和やかな笑顔と愛情深いまなざしで、私たちを包んでくださった神戸さんが、今でも私たちを見守っていてくださるのではないかと、ふと思ってしまう。謹んでご冥福をお祈りいたします。

《学部消息》

理学部長と理職の交渉

理学部長と理職（理学部職員組合）の交渉は、昭和60年9月24日と10月28日に行なわれた。主な内容は以下の通りである。

1. 人事院勧告について

理職は人事院給与勧告が完全実施されるよう学部部長としての努力を要望した。学部部長は完全実施の要求に同意を示し、総長、国大協等を通じての努力を約束した。また理職は予測される新俸給表への移行が職員の待遇改善につながる方向で行なわれるよう要望し、学部部長も善処を約束した。

2. 勤務延長・再任用について

理職は来年3月退職予定者の勤務延長及び今年勤務延長者の再延長・再任用を要求した。学部部長は「2名の勤務延長を強力に推している。状況は厳しいが再任用も含めて努力する。」と述べた。

3. 定員外職員の定員化について

理職は定員化を希望している2名について見通しを尋ね、学部部長は「本年度中に定員化されるよう努力する。」と答えた。

4. 行（二）から行（一）への振替について

理職は振替を希望している2名について見通し

を尋ね、学部長は「職務実態にふさわしく振替が実現するよう努力する。」と答えた。

5. 昇格について

理職は図書・技術系職員の5等級昇格への再上申について尋ねたが、学部長は「該当者全員を再上申した。」と答えた。

6. 技術系職員の専門行政職俸給表への移行について

理職は8月に提出した「大学技術系職員に対する専門行政職俸給表適用についての要望書」についての見解を尋ねた。学部長は要望書に示された基本的理念に理解を示した。

また理職は文部省が示した検討委員会試案について、理職の基本的要求とは相いれぬものであるという見解を示し、理学部としての今後の対応を尋ねた。学部長は「国大協の対応が重要であり、国大協に専門行政職俸給表適用のためのワーキング・グループを作るよう提案する。理学部にも技

術職員問題検討小委員会を置き、国大協への要望書を作る等の努力をする。」と述べた。

7. 教務職員の待遇改善について

理職は、教務職員制度の廃止・助手講師振替・職名によらぬ昇格を求める要望書を提出し、これらの要求を教務職員固有の問題として実現するよう要望した。学部長は「現在の教務職員制度が矛盾に満ちていることは承知している。専門行政職問題とのからみもあるが、教務職員固有の問題もあり、全国理学部長会議でも検討したい。」と答えた。

8. その他

理職で行なった助手の実態調査については学部長は今後の理学部のあり方を考える上で参考になるので活用したいと述べた。また助手の特昇の運用について話し合われた。

(以上)

教 授 会 メ モ

9月25日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 研究生の入学について
(4) 研究生の期間延長について
(5) 人事委員会報告
(6) 教務委員会報告
(7) 企画委員会報告
(8) その他
東京大学学務関係事務電算処理
委員会報告

- (2) 人事異動等報告
(3) 人事委員会報告
(4) 会計委員会報告
(5) その他
東京大学学務関係事務電算処理
委員会報告

10月16日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認

11月20日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 人事委員会報告
(4) 昭和61年度文部省内地研究員の
受け入れについて
— (5) その他

理学博士の学位授与者

〔昭和60年9月26日付（5名）〕

専門課程	氏名	論文題目
論文博士	飯 哲 夫	タバモウィルスのゲノム構造に見られる普遍性と多様性
化学	長 瀬 敏 雄	エポキシドと求核試剤を合成ブロックとする新しい有機合成反応の研究
論文博士	天 笠 準 平	フォトダイナミック作用による転移RNAの不活性化
地球物理学	日比谷 紀 之	海堆上での潮汐流による内部波の生成機構
論文博士	盧 家 福	直流磁束パラメトロン計算機技術—ジョセフソン計算機設計への新しい接近

〔昭和60年10月28日付（2名）〕

物理学	木 村 薫	アモルファス AS_2S_3 の光構造変化とバンド端の局在状態
生物化学	浜 千 尋	Col Ib プラスミドのDNA複製を正及び負に調節する <i>rep Y</i> 及び <i>inc</i> 遺伝子

人 事 異 動

（講師以上）

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備 考
化学	教授	朽 津 耕 三	60. 10. 12	併 任	評議員 62.10.11 まで
物理	教授	藤 井 忠 男	60. 10. 16	配 置 換	神戸大理教授
"	"	"	"	併 任	本務：神戸大理教授 61.3.31 まで
物理	講師	岡 林 孝 郎	60. 11. 1	昇 任	助手から
地理	助教授	大 森 博 雄	60. 11. 16	昇 任	講師から

（助 手）

数学	助 手	柘 田 幹 也	60. 9. 30	辞 職	大阪市立大講師へ
生化	助 手	東 島 勉	60. 10. 1	復 職	
植物	助 手	坂 野 勝 啓	60. 10. 1	転 職	農生研，研究室長へ
鉱物	助 手	大 隅 一 政	60. 10. 1	昇 任	高工研，助教授へ

（職 員）

物理	事務官	二 見 晴 美	60. 10. 1	採 用	
----	-----	---------	-----------	-----	--

海外渡航者

(6ヶ月以上)

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
天文	助手	尾中 敬	オランダ アメリカ合衆国	9. 6～ 61. 6. 21	天文学に関する調査研究のため
物理	助手	石井 克哉	アメリカ合衆国	9. 14～ 61. 9. 17	渦現象の数値的・理論的研究のため
数学	助手	木村 弘信	フランス	9. 8～ 61. 10. 1	日仏セミナー「複素領域における微分方程式」出席及び研究連絡のため
中間子	助手	久野 良孝	カナダ	10. 2～ 61. 9. 30	K中間子崩壊研究参加のため
鉱物	講師	小澤 徹	アメリカ合衆国	10. 21～ 61. 8. 19	鉱物の微細組織の研究のため

外国人客員研究員報告

所属	受入れ教官	国籍	氏名	現職	研究期間	備考
物理	西島 教授	デンマーク	J. AMBJORN	ニールスボーア研究所所員	60. 8. 13～ 60. 9. 13	ニールスボーア研究所
物理	宮沢 教授	インド	P. P. DIVAKARAN	タタ基礎科学研究所所員	60. 8. 11～ 9. 11	タタ研究所
物理	宮沢 教授	中華人民共和国	宋 孝 同	杭州大学 助教授	60. 8. 13～ 9. 13	中国政府
物理	江口助教授	日本	三 田 一 郎	ロックフェラー大学教授	60. 7. 28～ 60. 9. 7	ロックフェラー大学
物理	江口助教授	日本	二 宮 正 夫	ブラウン大学 助教授	60. 7. 25～ 60. 8. 25	ブラウン大学
物理	宮沢 教授	日本	須 浦 寛	ミネソタ大学 教授	60. 10. 1～ 12. 31	ミネソタ大学
数学	藤田 教授	ブラジル	V. Ruas Santos	カソリカ大学 準教授	61. 1. 1～ 2. 28	ブラジル政府
数学	岩堀 教授	日本	鈴 木 通 夫	イリノイ大学 教授	60. 10. 5～ 61. 1. 4	JSPS
数学	伊藤 教授	シンガポール	Stephen T. L. Choy	シンガポール 大学準教授	60. 10. 25～ 11. 7	JSPS
数学	塩田助教授	ドイツ連邦共和国	Herbert Popp	マンハイム大 学教授	61. 3. 2～ 4. 30	マンハイム大 学
地物	佐藤 教授	アメリカ合衆国	David D. Jackson	カルフォルニア大学 ロスアンジェルス校教授	60. 11. 5～ 61. 6. 15	
地質	飯山 教授	フランス	Jean-Hugues THOMASSIN	オルレアン大 学助教授	60. 8. 14 61. 11. 15	JSPS CNRS

編集後記

前号ゲラー先生の文中、カットを入れるつもりが手違いで空白になってしまいました。不手際をお詫びします。

去る6月30日に亡くなられた高橋秀俊名誉教授は、ロゲルギストのひとりとして文筆家でもられました。先生を偲んで遺稿を転載させていただきました。

神戸事務長補佐が急逝され、学部長と石井さんには、校正段階に短時間で追悼文を書いていただきました。お引き受け下さったことに感謝いたします。
(松野記)

編集：

佐佐木 行 美 (化学)	内線	4 3 5 9
田賀井 篤 平 (鉱物)		4 5 4 4
高 橋 正 征 (植物)		4 4 7 4
矢 崎 紘 一 (物理)		4 1 2 3
松 野 太 郎 (地物)		4 2 9 4
